
みこみこ ~岩城神社日誌~

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みこみこ～岩城神社日誌～

【Zコード】

N7117C

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

岩城神社の巫女達の生活をつづっていく、愉快でほのぼのとする日誌。

腰は大事に

「聰史みーつけ」

それと同時に別方向から飛び出し田標に向かつっていく子供。ふつ、甘い。あんたのことはすでに見つけており、ワザと見逃していたのだ。そう私が確実に缶を踏めるように。

確かに缶を目指している子供より、優衣が居る位置のほうが近い。そして優衣も缶を目指して走り出すのだが、突然、カツーンっと缶は明後日の方向へと飛び去ってしまった。

そして缶を蹴った本人は鬼のような形相で優衣に近づき、襟袖を持つと顔を近づける。

「優衣、あんた今、何やつてた？」

「美羽（）、顔が怖いよ」

「そんなことより、何やつてたの？」

「えっと、缶蹴り」

「何で？」

「缶蹴りは身を潜めながら鬼の動向を探りつつ、その隙を見て缶を蹴る。忍者には欠かせない修行方法なんだよ」

相変わらずワケの分からぬ説明だが、美羽の顔には笑顔が戻つた。一応…。

「へえ（）、そうなんだ。つで、あんたは何時から忍者になつたんだ」「美羽、穏やかな笑顔からもの凄い殺氣を感じるんだけど」「でしううね」

「認めるの！」

「当たり前でしょ！　とりあえずあんたの職業は何だ、言つてみろ」

「巫女です、巫女さんです（）」

半泣きになりながらも優衣は健気に答える。まあ、この場合健気かどうかは分からぬが、それでも美羽の尋問は終わらなかつた。

「つで、あんたが今日やる仕事は？」

「拝殿の雑巾掛け」

「それがなんでこんな所で缶蹴りなんてやつてるのかな？」

「いやー、子供達に遊ぼうって誘われると断れなくて」

「そう、それわよかつたわね。もう子供達帰つたみたいだから」「ええつ、また私のこと見捨てたの！」

「あの子達もなかなか学習能力があるわね」

「うー、裏切り者！」

「はいはい、じゃあ仕事に戻るわよ」

そのまま美羽は優衣を引き摺り、拝殿へと向かっていった。

「とりあえず、雑巾と水の入ったバケツは用意しておいたから、後

はちゃんと雑巾掛けやんのよ」

「けどや、なんで雑巾なのかな」「はあ？」

「いやー、モップとかなら乐じやない」

「まあ、確かにそうかもしれないけど。神社の一角をモップで掃除するのもシユールじやないか」

「そんなことないよ。たとえ古い建造物でも最新の器具で掃除してるじやん」

「というか、もういい加減に樂したいと言え」

「楽に掃除がしたい！」

「本当に言いやがつたな…」「いつ」

「えつへん！」

「いや、胸をはれる事じやないから。それとウチの神社にはモップはありません。モップが欲しければ自費で買って来い」

「がーん」とシヨックを受ける優衣だが、すぐに立ち上がりと美羽の肩に手を掛けた。

「じゃあ、割り勘といつことで」

「何故私がお金を出さねばならない」

「だつて、美羽だつて拝殿の掃除するでしょ。そのときモップを使えば楽じゃん、だから一緒に使うということ」

美羽は大きく溜息を付くと、今度は逆に美羽が優衣の肩に手を掛けた。

「残念だつたね優衣。私、拝殿の掃除とかあまりやらないから

「そんなのするい！ えこひいきだ」

「ならあんたも社務所の仕事を覚えろ」

「ぐつ」

「というか、せめてパソコンぐらい使えるよつになれ」

「う~」

「じゃあ、後は任せたわよ」

そう言つて立ち去つていく美羽の背中をにらみつけた後、優衣は溜息を付いて雑巾をバケツの中に入れるのだった。

「拝殿の掃除終わりました~」

「おー、お疲れ様」

「あれ、大輝さんは？」

社務所に帰つた優衣を出迎えたのは神主の大輝ではなく、パソコンの前で操作をしている美羽だつた。

「ん~、用事があるとか言つて今は出かけてる

「はあ、私もお使いでいいから出かけたいな」

「あなたの場合、そのまま遊ぶだろ」

「あははっ」

はいはい、最後は笑つて誤魔化しました。

それにしても、雑巾掛けつてどうしてこんなにも腰が痛くなるのかな

「腰曲げて走るんだから、結構腰に負担がかかつてるんでしょ」

「おお、なるほど~」

「いや、別にそこまで感心するほどじゃないぞ」

「……」とは、腰を曲げずに雑巾掛けをやればいいんだ

「……いつたいどうやつてだ？」

「ん~、ほふくせんしんとか」

「どれだけ時間がかかるんだよ。それにそれだと自分も汚れないか、
なにせ床に這いつぶばつてるんだし」

「そう、まさに一石二鳥」

「一応言つておくがオチでないぞ」

「あははっ」

いや、今回は笑つてもオチないぞ。

腰は大事に（後書き）

私の作品を読んでくださっている方がお気づきかもしだせんが、このみこみこは以前、短編で投稿した物なのです。

それが何故か続きが降りてきてしまつて、まいつか、連載にしまえということで連載のみこみこが始まつたわけですが、すでに別の連載を書いてる私には結構な負担で更新が届こうると思うので、お願いですから、長い目で見てやってください、お願いします。そんなワケで、もしかしたら自分で自分の首を絞めているんじゃないかと思った葵夢幻でした。

巫女萌え

「境内の掃除終わりました」

「おー、お疲れ様。結構早かつたつて事は今日はサボらなかつたみたいね」

「うー、私だつてちゃんと仕事をしてゐる時があるよ普通なら毎日ちゃんと仕事をする物だ」

「あははっ」

笑つて誤魔化した後、優衣は美羽が今仕事をしていゝ机の横、一応自分の机に腰をかけた。

「そういえば、大輝さんは？」

「あー、なんか今日新しい人が来るからつて迎えに行つてゐる「バイトの人？」

「いや、ちゃんと巫女の資格を持つてゐる人みたいだよ」「へえー、珍しいね。今時巫女の資格を持つてゐるなんて」

「それは巫女のあんたが言う言葉か」

「それにしても、なんで巫女になんてなつたんだろうねその人？」「それも巫女のあんたが言う言葉か。それにあんたはどうなのよ、どうして巫女になつてるわけ」

「私？ 私は元々ここでバイト巫女をして、なんか就職活動するのも面倒なつて思つてたら、いつの間にか正式な巫女になつてた」「まあ、確かに巫女には正式な資格は要らないけど、あんたの場合ここに居たほうが楽できると思つたからじやないか」

「だよねー。神社つてそんなに人が来ないし普段の日は結構暇だし、接客業としては最高だよ」

「いや、少しは否定しろよ」

「でも事実じやん」

「その前に巫女として、いや、人間として否定しろ」

「うー、そういう美羽はどうして巫女やってんのよ」

「私はちゃんと神道系の大学を出てから、この神社に赴任してきたのよ」

「美羽、大学出てるの！ その前に神道系の大学って何？」

「あんたな、一応神社で働く巫女としてそれぐらい知つておけよ」
それから美羽は大学のことや、神道のことを事細かく優衣に説明してやつた。それこそ優衣が「もういいよ」というぐらいに。

それから数十分後。

「ただいま」

「あつ、大輝さんおかえりなさい」

「おかえり～」

大輝が帰ってきた。大輝は一人の社務所の掲示板の前に呼ぶと、外で待っているのか、一度外に出て中に入るよう促した。

「こんにちわー！」

そして中に入ってきた新しい巫女さんは元気が良すぎるほどの挨拶をした後、二人の前に立つ。

「七海皆穂君だ。今日からこの神社で一人と同様に住み込みで働いてもらうことになった」

大輝は簡単に皆穂を紹介すると皆穂は前に出て大きく頭を一回下げた。

「そんなワケでお一方ともよろしくお願いします」

「私は染野美羽そめのみうこちらこそよろしくね」

「浅井優衣あさいゆいそんなんわけでヨロー」

「あんたね、ちゃんと自己紹介しなさいよ」

「そういえば皆穂はどうして巫女になったの」

無視かよ、しかも直球だよ、そしてもう呼び捨てかよ。突っ込みどころ満載で私には突っ込みきれん。

「私、ずっと憧れてたんですよ。巫女さんに」

「へえ、珍しいね、巫女に憧れるなんて」

「一応あなたもその巫女だぞ。つで、憧れの巫女になつた感想は？」

「はい、やつと念願の巫女のコスプレができて感激です」

「コスプレいうなー」というか憧れてたつてそつちかい」

「はい、メイドど中华らにしようかなと思つたんですけど、巫女のほうがコスプレしながら働ける先が多かつたんで巫女になつたんですよ」

「あんたは巫女服が着たくて巫女になつたんかい」

「はい、だつてコスプレしながら働くなんて最高じゃないですか。まさに「石」一鳥」

「だよね、こんな楽な仕事つて他に無いから最高だよね」

「はい、そうですよ」

「うんうん、そうだよ」

「何だろ?」この二人、何故か同じようなにおいがするんだけど。

「そうだ。優衣さん、ちょっとお願ひがあるんですけど」

「んつ、なに、何でも言つてごらん」

さつそく先輩ぶつてるよ、ここつま。

「後で私の写真をとつて欲しいんですよ」

「写真? なんで」

「はい、写真集にして今度のコミケで売るんですよ」

「コミケって、あんたオタクかい?」

「はい、そうですよ。私はコスプレオタクですよ」

……いや、もう、なんと突っ込んでいいやら。

「了解、そういうことなら協力するよ」

「やつてもいいけど、仕事が終わつてからこしりよ」

「うー、分かつてゐるよ。それで、ビショまで脱ぐの」

「いきなりそつちかい!」

「やつぱり和服は半脱ぎが一番です」

「あんたもやる気かい!」

「ちつちつちつ、美羽は分かつてないな」

「何がよ」

「男は狼、狼だよ。だから少しでも口を入れれば売れること間違いないし！」

「いや、そもそもしないけど。その発言は女としてどうかと」「美羽さん、頭が古いですよ。今では女もそれぐらいやらなこといけないんです」

「というか、あんたらのような奴が日本をダメにしていくんじゃないいか」

「いいや違う。これは退化ではない、進化なのだよ美羽」「そうです。優衣さんの言うとおりです」

『あ～はっはっは』

声を揃えて笑う一人を見て美羽は頭を抱えて溜息を付く。

えつと、つまり、私の頭痛の種が増えたつてこと…。

……合掌。

するな！

巫女萌え（後書き）

そんなワケでみこみこ第一話でした。

まあ通じてる人はこの作品のモデルを分かつてるとかもしかれないけど、あくまでも参考にしているだけで盗作ではないですよ。なのであまり深く考えずにみこみこをお楽しみください。

そんなワケでここまで読んでくださりありがとうございました、そしてこれからもヨロー。

以上、ついにネタがきた（一話でかい）葵夢幻でした。

巫女派？ メイド派？

「お邪魔します！」

そう元気よく美羽の部屋に入ってきたのは優衣。そしてここは皆

城神社の裏手にある、住み込みで働く巫女達に立てられた寮だ。

岩城神社自体、かなり辺ぴなところに建つてるので寮が設けられている。

「おー、いらっしゃい。といつてもさつき分かれたばかりだけどね」

美羽はキッキンから顔を出すことなく、優衣を招き入れた。

美羽の部屋は2ＬＫ、寮としてはかなり優遇されており、キッキンも対面式と設備も意外と良かつたりもある。

優衣はリビング置いてあるクッショニン腰を下ろして、まるで自分の部屋の用にぐつぐつ。

「まあ同じところに住んでるんだから当たり前だけ、やつぱり挨拶は大事だよ」

「へえ～、あんたにしてはまともなことを言つわね

「しょせん社交辞令だけどね」

「そういうことをはつきりと口にするなー。それにしてもあんた、その格好は何とかならないのか？」

「そんなに変？」

「いや、変というか、いへり部屋着とはこえ長襦袢ながじゅばんをそのまま着てるのはどうかと思うべ」

「え～、美羽だつて同じじやない」

「私はちゃんと仕事用、部屋着用で分けてるし、今は羽織を羽織つてるでしょう」

だが優衣は小さく声で不満を漏らす。

「どつちにしう変わらないじやん。それに美羽だつてその姿でキッチンで料理してるじやん」

「ないか言ったか」

「いやいや、別に何も言ってないよ」

「それに今日は皆穂の歓迎会でしょ。その発案者がそんなラフな格好でいいのか」

「いやいや美羽、新しく入ってきた仲間だからいや、普段の自分を見せるんじゃない。ここに堅苦しい歓迎会をやつても打ち解けられないでしょ」

「いや、やうかもしれないけど」

長襦袢も着るこしてちやんと着ろよ。少々はだけてるし、下手すると見えてるだ。

「それで、皆穂は？」

「ん~、なんか歓迎されるだけだと申し訳ないので、少し手伝つたために準備するつて言つてた」

「皆穂もそこまで気を使わなくていいのにね」

「やうだね。けど、初めて見知つた仲で只歓迎されるのも気が引けるんじゃない」

「まあ、そうかもしれないけど」

「それに皆穂のことだから、絶対になにかやつてくるよ!」

「そうだった! 皆穂はこいつと一緒に私の頭痛の種だった。……けどまあ、今はプライベートだから、そんなに突っ込むこともないでしょ。」

「お邪魔しまーす」

「おひ、噂をすれば来たみたいだよ」

「今日は私のために歓迎会を開いてもらつて、ありがとう! やつます」

そういうて入つてきた皆穂を見て、優衣は快く向かい入れたが、美羽は手が止まりその場で固まつてしまつた。

「あつ、これ飲み物です。皆で飲むように用意してきました」

「おおつ、ありがとう!」

「それと美羽さん、お手伝いします。新参者とはいえただ歓迎されるのもあれなので」

「……」

「美羽さん」

「みーう」

「はっ、いかんいかん、つい我を忘れていた」「どうしたんですか美羽さん、なにかショックなことでもあつたんですか」

「あなたの今の格好に凄いショックを受けたのよ」

「え、そんなに変ですか?」

「そんなことないよ、凄く似合ってるよ」

「いや、似合つてるとかそれ以前に、なんでメイド服を着てるんだ！」

「何を言つてるんですか美羽さん。お手伝いといえばメイド、これ以上のものが何処に存在すると思つていいんですか」

「いやいやいやいや、なんとなれば理解できるが、誰もやしまで要求しないから。

「うんうん、そうだよね。やつぱりそこ今までしない」と意味がないよね

「いやいやいやいやいや、ちょっと待て、私にはやじである意味がまったく分からん。

「それじゃあ美羽さん、お手伝いしますね」

「ああ、じゃあ、そこ出来上がったものをテーブルに持つてってくれる」

「はー」

皆穂はキッチンの端に置かれてくるお皿を持つと、優衣が居るテーブルへと持つていぐ。その姿はわながらビーバーの喫茶店を感じさせるものがあった。

「おおっ、じゅう風に料理を持ってこられたと、ビーバーの喫茶店に行つてゐみたいだね」

「私の部屋はいつから『ビーチ』かの喫茶店になつたんだ」

「でもさ、でもさ。メイドさんにはいつこう風にされるとい、まるで自分が偉くなつたように感じない？」

「というか、皆穂の本職はメイドじゃなくて巫女だぞ」

「それでもメイド服を着た皆穂に給仕されると本物のメイドみたいじゃない」

「えへへつ、ありがと『うわこおず』

「そこはお礼を言つところなのか」

「これもメイド服に秘められたパワーなのかな？」

「どんなパワーだよ」

「要するに、メイド萌えだよ！」

いや、そんな親指立てて力説せても困るんだが。

「さすが優衣さん。よく分かつて『うりつ』しやる。やはりメイドには、それなりに萌えパワーが秘められているんですね」

萌えパワーっていつたいなに！ もう私は付いていくん。

「だよね。いつもやってメイドの皆穂をみてると、私もメイドをやりたくなつてくるよ」

「よくサボるあんたに、メイドなんて務まるわけないでしょ」

「それは違いますよ美羽さん」

「何がよ」

「コスプレとはなりきることから始まるんです」

「いつからコスプレの話になつた。今までメイドの話をしてただ

る」

「分かつてないです美羽さん。今の日本に本物のメイドさんなんて、そう簡単に居ませんよ」

えつ、なんでそこだけ現実的なの？

「ですから『コスプレでメイドの萌えパワーを補つてるんですよ』

「ということは、同じその喫茶店は萌えパワーの宝庫」

「まさにその通りです。あれこれ『コスプレメイドの聖地なんです』

「そりだつたんだ！」

……優衣、それはそこまでショックを受けることなのか？

「はあ、ここちは全部出来上がったから、一人とも遊んでないで運んでくれないか」

「あつ、はい、すいません」

「皆穫、がんばれ」

「あなたも運びなさい」

「う~、わかつたよ」

こうしてテーブルの上には様々な料理が並び、各自のラップにはジューースが注がれた。

「それじゃあ、新しく入ってきた皆穫を祝して」

『かんぱーい』

乾杯を交わした後、それぞれ話に花を咲かせるが、皆穫は美羽をじっと見詰めていた。

「んつ、なに、どうしたの皆穫」

「う~ん、美羽さんの格好もなかなか萌えますね」

「はあ？」

「うんうん、なるほど。メイドも確かにいいけど、和服も何かしら惹かれる物が」

どんなんだよ。

「やはりメイドが一番人気があると思うのですが、和服や巫女もそれに負けずにマニアが多いことも確かですね」
皆穫、そういうわれても私には付いていけん。

「やっぱり、巫女萌えも多いのかな」

「はい、今では着実にその数が増えているようです」

そんな統計を皆穫はとつてているのか

「ということはつまり……」

「つまり何なのよ？」

「初詣や神社の祭りに来る人は巫女萌えが多い！」

「勝手に参拝客をそつちにもつていくな！」

「けど、そういう人がいることは確かですよ」

「いるのか…やっぱり。」

「まあ、世の中にはいろいろな人がいるってことだよ」

「そうね、あんたらを見るとそれが良く分かるわ」

「まさに十人十色ですね」

「そうね、けど……あんた達はかなり特殊な色みたいね。もう私は何色なのかも理解が出来ん。」

そんな美羽に関係なく、夜は更けていくのだった。

巫女派？ メイド派？（後書き）

そんなワケで今回はメイドを入れてみました。うへんやはり巫女のメイドの融合は難しい。そんなわけで今回はこんな形でお送りしました。

それではここまで読んでくださいありがとうございました。これからも更新が遅れるかもされませんが、よろしくお願いします。以上、やっぱり巫女萌えの葵夢幻でした。

たまには過去を振り返って反省しやー。

「はい、今回は経費で落としてあげるけど、次は自費で払つてもらひうからね」

「あははっ、ごめんね美羽、ほんと感謝するよ」

笑いながら謝つて来る優衣を見て、美羽は大きく溜息を付いた。

「あなたの感謝は本当に薄つべらく感じるわ」

「それは美羽の心が黒いからだよ」

「あんたが言つた！　どうか黒いって何だ黒いって、私はそんなに悪役か！」

「けど似合いそうだよ」

「勝手に決めるな！」

「ただ今戻りました」

そこへ買出しに出かけていた皆穂が戻つてきて、荷物をとりあえず自分の机の上に置くと一人に元へと向かつた。

「何があつたんですか？」

「ん～、美羽には悪役が似合つたって話をしたの」

「お前はまだそれを引っ張るのか。皆穂、皆穂からも何か言ってやつてくれ」

「そうですね。やっぱり美羽さんは悪役より、ツインテールですよ」

「はつ？」

突飛のない皆穂の発言に美羽と優衣は声も顔も揃えて、ワケが分からぬといふ反応を示した。

「いや、なんで私はツインテールなんだ？」

「そんなの決まつてるじゃないですか。それは美羽さんが……シンデレだからです」

「ちょっと待て、いつから私はそんなキャラになつたんだ」

「そんなの最初つから決まつてるじゃないですか。そしてツインテ

ールはシンテレの象徴なんです。だから美羽さんはシンテールが似合うんですよ」

「勝手に決めるなー」

「美羽の場合シンテレってこうより、シンシンしてるだけって感じがするけど」

「その原因のほとんどがお前のせいだろ？　うひつ、これを見てもそれが分かるだろ」

「美羽、そんなに顔に押し付けられても見えないよ～」

「何ですか、それ？」

美羽は優衣の顔に貼り付けていた紙を皆穂に渡した。

「領収書、算代。なんですか、これ？」

「こいつが近所の子供達と野球をやつててね。それで算をバット代わりにして遊んでたら算が壊れたのよ」

「いや～、見事に算の芯に当たってホームランになつたんだけどね。その代わりに算が真ん中からぱつきりと折れちゃつたの。やつぱり硬球だとボールの飛びが違うね」

「そういう問題じゃないでしょ」

「だから今度から軟球でやるよ」

「それも違う！　あんたはこの神社の巫女でしょ。巫女なら巫女らしく巫女の仕事をしなさい！」

「う～、ちょっと休憩ついでに野球をやつてただけじゃん」

「それは休憩とは言わん、サボってるって言つんだ」

「まあまあ美羽さん、そんなに怒らなくとも」

「はあ、私だって好きで言つてる訳じゃないわよ。まあ、私も時たまなら大目に見るけど、こいつは毎日のようにサボってるから言つてるだけよ」

「じゃあ、今度から一日おきにするよ」

「それは一日おきにサボるという宣言なのかな」

「あははっ、けども神社の仕事つて結構暇じゃない。だからあんまり問題ないんじゅ」

「」

「仕事が暇だつて感じるのはあんたが仕事を覚えないだけでしょ。ウチだつて地鎮祭やら結婚式やら、いろいろとやつてるのよ」

「え！ そうなの？」

「今までどんな仕事をしてきたんだお前は！」

「境内や本殿拝殿の掃除とか、社務所でのお守り売りとか、そんなただけだ」

「ああ、そういうえばあんたそんなことばっかりだつたわね」

「おおつ、だから時々ウチの神社に人が集まるのは結婚式をやつていたからか」

「今頃気付いたんかい！」

「というか優衣さん、結婚式の準備とか結構忙しいですけど、そういうこともやつたことないんですか」

「えつ、うーん、そうだな。……おおつ、そういうえば、何か美羽に今忙しいからこれやれつて押し付けられることがたまにあるけど、あれそつなのかな」

「ああ、そうだよ。あれが結婚式の準備だよ」

「なるほど、そうだつたんだ」

「優衣さん、今まで気付かずにやつてたんですか？」

「あははつ、私は言われたことだけやつてるだけだから」

「そんなんだから仕事を覚えられないんじやなのか」

「けど、今まで大輝さんに注意されたことないよ」

「それは只単に雑用係としか見てないからじやないか」

「なるほど、つまり私は縁の下の力持ちなんだね」

「いや、あつてはいるけど。そこは悔しがるとこひうじやないのか」

「まあ、前向きだからいいんじやないですか」

「そこまで前だけを見続けてどうする」

「えつ、えつと、……まあ、過去を悔やまずにすむのでは」

「せめて過去の過ちから何か反省して欲しいものだな。特にここにこいつは」

美羽は皆穂の方を見ながらも、親指で優衣を指差す。

「う～、私だつていらうと反省してゐるよ

「ほう、例えば？」

「例えば、そうだね。昨日コロッケに醤油をかけちやつたから、今度からちやんとソースか醤油かを確かめるようにしようとか。あとこの前の休日にいつもと同じように用覚ましをかけちやつたから、今度からちやんと明日が休みか確かめるようにしてゐよ」

「あんたの反省はその程度かい！」

「あの優衣さん、もう少し仕事のことでも反省する」とはなにんですか？」

「う～ん、そうだね。ない」

「はつきりと言いやがつたな、こいつ」

「優衣さん、それだとフオローできませんよ」

半泣きになる皆穂を見て、さすがの美羽も大きく溜息を付いた。
そして当本人である優衣はとこうと、いつものように最後は笑つて誤魔化すのであった。

たまには過去を振り返って反省したりー（後書き）

そんなワケでお送りしました今回の「みじみじ」。なんといつもしようと、文章のほとんどが台詞というのも結構珍しい小説なのではなかと、最近思い始めました。

うへん、けど、書いてるとどうしても台詞が多くなるところか、ほとんどの台詞になる。これはここのだらつかと、最近ひょっと心配になってきた。

それでも、面白ければまあいいかと開き直ったりもします。それではここまで読んでくださいありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

以上、なかなかみじみじのネタが出てこない葵夢幻でした。

祭りの準備 その1

大小、どんな神社にも関わらずお祭りとこいつは有る物で、この岩城神社にも祭りの時期が迫っていた。

「それじゃあ、各自の役割を発表するわよ」

「美羽、その前に大輝さんは？」

「ああ、出店の割り振りをかねて、商店街でいろいろとやつてるみたいよ」

「神主さんも大変ですね」

「まあ、神社にとつては大忙しの行事だからね。今年も地獄のよう忙しさになるんじゃない」

「はあ、それを思うと、私もたまにはお祭りを楽しみたい！ って思うよ」

「なら他の神社のお祭りに行けよ」

「けどさ、他の神社は遠いじゃん。だからそこまでして行きたいとも思わないんだよね」

「結局どっちなんだよ、お前は」

「まあ、優衣さんの気持ちも分からなくは無いですよ」

「そうかもね」

「ええ、なにせ巫女さんは田の保養になりますから。もう巫女萌えにはたまりません」

「結局皆穫はそっちか！」

「けど、ウチの神社にもそういう人が来るんじゃない」

……優衣、あまり否定できない発言はしないでくれ。

「なにせ巫女といえば清楚で可憐な感じがするから、巫女萌えの人はそこが好きなんじゃない」

「さすが優衣さん、よく分かつていらっしゃる」

「はあ、清楚で可憐ね。優衣、初恋クラッシャーの発言とは思えないわね」

「美羽さん、何ですか初恋クラッシャーって？」

皆穂の問いに美羽は大きく溜息を付き、優衣はその様子を頬を膨らませながら見ていた。

「皆穂、優衣が目を細めながら箒を持つてる姿を想像して『じりん』えつ、何ですか？」

「まあ、やつてみれば分かるわよ」

そう言われたから皆穂は優衣に目を向ける。未だに不機嫌な顔をしているが普段の顔を思い浮かべる。

優衣は瞳が大きいが、顔の形は整つており、その目を細めるとても大人っぽく、そして清楚で可憐に見てもしようがない。

そんな優衣が静かに箒を持つて掃除をしている姿を皆穂は心に思い描く。

「さすが優衣さん、見事です！」

ぐつ、と親指を立ててくる皆穂を見て、優衣は複雑な表情になる。「分かつた。優衣が眠そうな顔をして掃除をしてると、とても清楚で可憐で大人っぽく見えるのよ」

「ええ、よく分かります」

「だからよくここに遊びに来る、男の子達がいるでしょ」

「よく優衣さんと遊んでる子達ですね」

「そう、その中の数人がそんな優衣の姿を見て初恋を覚えるのよ」「分かります。神社で静かに掃除をする可憐な巫女さん。もの凄く絵になりますよ」

「でしょ。でも口を開くとこんなんだから、優衣に初恋した男の子達は数分の内に現実と第一印象がまったく違うことを覚えるというわけよ」

「……えつと、つまり、清楚で可憐で大人っぽい人だと思ったのが、実はその……」

「皆穂、そこははつきりとバカでアホでガキっぽいのはつきり言つていいわよ」

「う～、美羽もそこまで言わなくてもいいじゃん」

「まあそりがもしれないけど、現実と優衣の印象がまつたく違うことは確かでしょ」

「だつてそれは私にはどうしようもない事だよ。だから私に罪は無いもん」

「まあどうせここじゅ、優衣が初恋クラッシャーだということが分かつた、皆穫」

「えつと、はい、よく分かりました」

「う~、皆穫も少しばフォローしてよ」

「優衣さーん、無理ですよ~」

「う~」

「はいはい、そこまでにして」

美羽は手を叩くと、改めて机においてある紙を手に取る。

「それじゃあ、お祭りの役割を発表するわよ」

「は~い」

「ええ」

「とりあえず、優衣はいつもどおりに社務所でお守りや絵馬の販売

とバイトの子達の面倒を見てあげて」

「本当、いつもどおりだね」

「というか優衣さんにバイトの子達を任せて大丈夫なんですか

「み~な~え~、それはどうこう意味かな

「優衣さん、顔が怖いですよ」

「それは大丈夫よ皆穫、優衣はこう見えても長年この神社で働いてるから、特に販売所のところはよく分かってるし、何故か、こう見ても人望だけはあるからバイトの子達も優衣の言つことはちゃんと聞いてくれるのよ」

「へえ~、そうなんですか

「皆穫、なにその、意外です、って言つ顔は」

「えつ、そんな顔してないですよ」

「ほ~、なら鏡でももつてこよ~つか」

「はいはい、そこまでにして。それで私は大輝さんと祭事を行って

るから、皆穂はその補助役をお願い

「補助役って、何をすればいいんですか？」

「簡単に言つと、祭事がスムーズに進むように前準備や、後片付けをやつてもらつわけだけど、祭事は一度リハーサルのようなことをやるから、細かいことはその時にね」

「あつ、はい、分かりました」

「さて、ここからが問題なのよね」

美羽は紙を机の上に戻して疲れた顔になり、優衣は何故かじゅんけんで勝つために手を組んでその中を覗いていた。

「えつと、何をやるんですか？」

「今年は皆穂はやらないけど、来年までには覚えてもらひ

「だから、何をですか」

「神楽よ

「ああ、神楽ですか。それで何でお一人はじゅんけんをしようとしてるんですか？」

「ウチの神社はお祭りの時には必ず一人の巫女が神楽を舞わないといけないのよ。だからどつちが神楽を舞うか、いつもじゅんけんで決めてんの」

「えつと、そんなに嫌なんですか。神楽を舞つのは」

「といふかね。お祭りの準備だけでも忙しいのに、神楽の稽古まで追加されるんだよ。もう正直、死んじゃうくらいの忙しさだよ」

「それは大変ですね」

「ちなみに来年の神楽は皆穂が舞うことになりましたから」

「何ですかー！」

「皆穂、一応あなた新人でしょ。だから必ず一度は神楽を舞つておかないといけないので、わかった

「はーい、分かりました」

「さて、じゃありますか」

優衣と美羽は凄い意気込みでその場から立ち上がる。

「去年は負けたけど、今年は勝たせてもらひよ」

「優衣と違つて私は忙しいのよ。だから今年も優衣に舞つて貰うからね」

「なんか、お二人とも凄い気迫ですね」

火花を散らしながら優衣と美羽は大きく手を上げ。

『じゃんけん、ぽん』

勢いよく振り下ろした。

ちなみに結果は美羽がグーで、優衣がチョキである。

「よし、今年も勝った」

「う～、また負けた。後出しだー！」

「変ないちゃもんつけるな！」

こうして岩城神社の祭りは、その準備に取り掛かっていくのだった。

祭りの準備 その1（後書き）

そんなワケで今まで一話完結で話を進めてきましたが、今回は珍しく続き物です。

まあ、とにかく理由は無いのですが、とにかく単に一話完結のネタが無いだけなんですけどね。

ではここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

以上、お祭りには巫女さん田舎で行く夢幻でした。

祭りの準備 その2

「はーい」

自室でくつろいでいた皆穂だが、突然ドアがノックされたので、ドアを開けた。

「うわあ

そこにはまるでホラー小説に出てくるように、たたずんでいる巫女の姿があった。そしてその巫女は皆穂に向かって倒れこみ、皆穂は思わずそれを避けてしまった。

結果、その巫女は床に頭を思いつきつぶつけることになる。

「うへ、皆穂へ、避けないで支えてよ~」

「えっ、優衣さんですか」

「そうだよ」

「いや、なんか、どとかの幽霊かと思っちゃいました」

「それくらい疲れてるんだよ。いいから起こして」

優衣さん、それは 子に見えるほど疲れてるって言つていいでしょうか?

とりあえず皆穂は優衣に肩を貸して、なんとかリビングのソファーに座らせることが出来た。

「皆穂へ、ご飯へ」

「人の部屋にきて第一声がそれですか」

「だつてへ、もう疲れて何もやる気がしないんだよ」

「お祭りの前だからといって、そんなに忙しいもんなんですか」

「私の場合は神楽の稽古があるでしょ。だから昼間はバイトの子達の面倒を見て、夜は神楽の稽古をせつさまでやつてたんだよ。だからもう、何もやる気が起きない」

「それで人の部屋にご飯をたかりに来たんですね」

「そういうこと」

相変わらずあつたりと認めるんですね。というか優衣さんには遠

慮という言葉は知らないんでしょうか。

「皆穂が作る分を倍にしてくれればいいから」

「私はさつき晩御飯を食べ終えましたよ」

「それじゃあ、私の分も作って」

「優衣さん、人に物を頼む礼儀という物を知っていますか？」

「疲れてるから、そこら辺は省略で」

「はあ、優衣さん、本当に疲れてるんですね」

「だから、さつきからそう言つてるじゃん」

「はいはい、分かりました。じゃあ、準備し…」

そのとき再び部屋のドアがノックされる。

「あっ、はーい」

とりあえず優衣のことは放つておき、皆穂はドアを開けると、そこには美羽が立っていた。

「おーっす、皆穂、もしかして優衣来てない？」

「優衣さんならソファーで死んできますけど」

「ああ、やつぱり」

死んでるってところは否定しないんですね。

「とりあえず、上がらせてもらひつわよ」

「えつ、あつ、はい」

そのまま一人はリビングまで行き、美羽はソファーで死んでる優衣を発見する。

「おお、おお、やつぱりこうなつてたか」

「美羽さん、なんか心当たりでも？」

「むろん大有りよ。神楽の稽古をしている先生が厳しくてね。去年もそうだつたけど、優衣は神楽の稽古が終わつた後は、必ず私のところにたかりに來てたのよ。もう疲れて何もやる気がしないってねまさしく、今がその状態です。

「そんな訳で、はいこれ」

そう言つて美羽が差し出したのはレジ袋だった。

「なんですか、これ？」

「食料」

「めし！」

優衣さん、そこに反応するほどお腹がすいてるんですか。

「とりあえず、商店街の人と打ち合わせをするついでに、スーパーでウナギを買つてきたから」

「随分と奮発しましたね」

「まあ、去年の経験から今のうちに精の付く物を食べさせておかないと、祭りの前に倒れかけないからね。だから今日は特別に優衣に食べさせてやるうと買つてきたの」

「その割には二つ入つてるんですけど」

「ああ、もう一個は私の分」

美羽さんまで私にたかるつもりですか。

「とりあえず、暖めるだけでいいみたいだからお願ひね」

「えっと、それは私に一人分のご飯を用意しようと」

「私も祭事の準備やら出店関係者との打ち合わせやらで忙しかったのよ。でも、皆穂はあまり忙しくなかつたでしょ」

「まあ、確かに、私は拝殿や本殿の掃除を念入りにやつてただけでしたから」

「だから一番疲れてない、皆穂が私達の晩御飯を作るの！」

「なにか納得する部分と納得できない部分があるんですけど」

「皆穂」

「なんですか優衣さん」

「世の中に矛盾は付き物だよ」

「いや、そんな親指立てて力説されても困るんですけど
「そんなわけによろしくー」

「美羽さん、はあ」

結局、皆穂は美羽の買つてきたウナギを暖めて、一人分のご飯を用意すると、二人が待っているリビングのテーブルに差し出した。

「あつ、皆穂、何か飲み物」

「私もお願い」

はいはい、もう分かりましたよ。

皆穂は水をコップに注ぐとその中に氷を入れて一人に差し出したのだが、一人はすでに食事を始めていた。

「という優衣さん、すごい食欲なんですけど。

「優衣、もう少し落ち着いて食べなさいよ」

「しゃって、おひやかしゅいてんしゃ もん」

「とりあえず口の中のものが無くなつてから喋れ」

いや、優衣さん、美羽さんにそう言われたからつて、一気に飲み込む必要も無いと思うんですけど。

「だつて、神楽の稽古でさんざん体を動かしてきたんだよ。そりや、お腹だつて減るよ」

「いや、それは分かつてるけど、とりあえず落ち着いて食べると言つてるんだ」

「はいはい、わかりましたよ」

いや、優衣さん。また一気にかき込むつてことは全然分かつてないつて事ですよ。

「おちやわり」

優衣は思いつきり空になつたお茶碗を皆穂に差し出すのだった。

「はあ、はーい」

「んぐつ、ありがとう皆穂」

「だからあんたは落ち着いて食べなさい」

ああ、もう、ボケとツッコミがエンドレスなんですけど。

半泣きになる皆穂を放つておいで、一人の食事は当分終わらそうにも無かつた。

祭りの準備 その2（後書き）

そんな訳でなかなか更新できないみこみこですが、とりあえず六話まで書き終えました。

というか連載を一本同時にやっている時点で自分の首を絞めてるんじゃないのか、でも始めてしまったものはしうがない。そんな訳でこれからもみこみこは更新が遅れると思いますが、どうか見捨てずによろしくお願いします。（というかエレメが盛り上がり過ぎちゃつたから、みこみこはなかなか書けないかも）

それではここまで読んでください、ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

以上、みこみこもちゃんと書かないとなと思いつ始めた葵夢幻でした。

祭りの準備 その3

「それじゃあ、今日の作業を簡単に説明しますね」

大勢のバイト巫女を前にして優衣はダンボールから袋にまとめて入つてあるお守り、そして絵馬を取り出した。

「今日は届いたこのお守りを所定の位置に整理してもらつて、あとは絵馬と破魔矢も同じように整理してもらつから。えつと、それじやあ……」

「優衣さんいますかー」

そんな時に突然、皆穂が社務所の売り場に顔を出した。

「ごめん、ちょっとまってて。つで、なに皆穂?」

「美羽さんが祭事の飾り付けでバイトを何人か回して欲しいそうです」

「そうじゃあ、佐藤さんと鈴木さんと高橋さん。皆穂に付いて行つて拝殿の方をお願いしますね」

『はい』

「じゃあ後は、田中さんと渡辺さんと伊藤さん、それに山本さんと中村さんはお守りの整理をお願い。後の人たちは絵馬と破魔矢の整理ね」

『はい、分かりました』

「あの~」

ぼーっとしていた皆穂にバイトの巫女が声をかけてきた。どうやら指示を待つているようだ。

「あつ、うん、ごめんね、じゃあこっちに来て」

『はい』

「それにしてもびっくりしました」

その日の夕食時。いつもと同じように皆穂の部屋にたかりに来た

優衣と美羽に、皆穂は口を開いた

「なにが？」

突然そんなことをいわれても分からぬだろうと、美羽が聞き返す。

「今日美羽さんの用事で売り場に顔を出したじゃないですか」

「それがどうかしたの？」

「いや、優衣さんがちゃんとバイトの人達を仕切ってるからびっくりしたって話なんですけど」

「もしかしなくとも、それは褒められてないよね」

「いえ、そんなことはないですよ。…だから、そんな怖い顔しないでください」

「うー、私そんなに怖い顔してないよ」

「あんたはそのオーラだけで人を齎すことが出来るのよ」

「勝手に人の特技を作らないでよ！」

「けど、優衣さんのオーラには鬼気迫るものがある」

「何か言つた、皆穂」

「いえ、なんでもないですよ」

「まあ、皆穂の気持ちも分からなくも無いけどね」

「うー、それって、そんなに私が怖いって事？」

「違うわよ。眞面目に働いてるあんたが珍しいって事よ」

「うー、私だつてやらなきゃいけない時はやつてるよ」

「それ以外はサボつてばっかだけね」

「……そうだね」

「つて、反論なしかい！」

「えー、だつて、事実だし」

「それは自白しているのか」

「違うよ。私はちゃんと現実を見詰めて真実を述べただけだよ」

「要するに、普段から眞面目に仕事して無いと認識はしているんだな」

「それとこれとは話が別だよ」

「いや、一緒にだから」

「だつて、普段と忙しい時はまったく違ひません」

「いやいや、だから一緒にだつて。例え普段が暇だらうが、今が慌しいのだろうが、巫女としてやる」とは一緒にだから

「…………まあ、せこいら辺は大目に見てよ」

「お前が言つな!」

「まあまあ、美羽さん」

「皆穫、あなたまで優衣のようになつちゃダメよ」

「なんで、突然私に振るんですか」

「念のためよ!」

「私は普段でも真面目に働いてますよ~」

半泣きになる皆穫を無視して、美羽は思いつきり優衣を指差した。

「と・に・か・く、優衣は普段でも真面目に働きなさい」

「うー、そんなにやる」とがあるわけじゃないから良いじゃん

「よくない!」

「そういう美羽は今日なにやつてたんだよ」

「私? 私は拝殿の飾り付けやら祭事のリハーサルやらで忙しかったわよ」

「でもお祭りが終わつたら、また暇になるじゃない」

「それはあんただけだ。私はお祭りでの収支の計算やら、手伝つてもらつた人や奉納してもらつた人への挨拶回りで、お祭りが終わつても忙しいの」

「へえ~、美羽って、そんなことまでしてたんだ」

「お前はこの神社で何年働いてんだ」

「あははっ、私はお祭りの後はその疲れでずっと寝てることが多いから」

「それは今年も祭りの後に有給を取つてこないと血虫してゐのか」

「あ~、いいですね、それ」

「皆穫も乗るな!」

「え~、だつて、今は田が回るぐらいの忙しさですよ。お祭りが終

わった後ぐりこみつべつしたいやないですか」「そうだよね～」

「あんたは後片付けとこいつ葉を知らんのか」

「……美羽さん、ファイト」

「そんな応援、いらんわ！」

「美羽、これも運命だから」

「私の運命はお前に決められるのか！」

「けど、そういう仕事つて美羽さんがやるよつて思えて、とても手伝おうとは思えないんですよ」

「それは手伝う気が無いだけでしょ！」

「違うよ美羽。なんていうかな～、なんかこいつ、美羽の仕事には手が出しづらいんだよ」

「やうなんですよね。なんか、手を出したら邪魔かなつて思つちゃうんですね」

「分かんないかな～、ここの感じが。ねえ、美羽～」

「いや、なんとなくは分かるが、とりあえず手伝ってくれ」

「無理」

「お任せします」

「納得いかねー！」

そんな感じでこいつそつ慌しくなつてこいく岩城神社であつた。

祭りの準備 その3（後書き）

ぐげーじばつと、思いつきり風邪ひいた。

そんな訳で、只でさえ更新が遅れ気味のみこみこがずいぶんとまた更新が遅れました。

というか、普段でもネタが無いのに、風邪ひいてる時なんて何も浮かんでこやしねえ。もういい加減に治って欲しいです。ではでは、ここまで読んでくださいありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願ひします。

以上、最近ちょっと風邪が治り始めた葵夢幻でした。

前夜祭 前

「いやー、それにしてもだいぶ騒がしくなってきたね
「そうですね。明日がお祭りなのに今から出店の準備をしている人もいますから」

賽銭箱の前で優衣と皆穂は祭りの準備が進められている境内を眺めていた。

「とゆうか、優衣さん。こんなところで油売つていいんですか」「皆穂、皆穂がそれを行っちゃおしまいだよ
えつと、何がお終いなんでしょうか。」

「私は今日の仕事は全部片付けたんだよ。まあ、夜に神楽の稽古があるけどね」

「と言いますか、もうそろそろ夕暮れなんですけど」「だから、こうして休憩をして英気を養つてるんじゃない」とてもそういう風には見えませんでした。というか、それは優衣さんの日頃の行いの所為でしょうか。

「そういう皆穂は大丈夫なの、こんなところにいて」「はい、私は新人なので今回は軽く手伝うだけですから」「ああ、そういえばそうだったね。ということは来年の今頃は右往左往しているわけだ」

それは何の予言なんですか、優衣さん。

「そういえば、美羽は?」

「美羽さんは、集会所でお祭りに関わってくれた人達を接待しますけど」

「ああ、それは美羽も大変だね」

やつぱり、それを聞いても美羽さんを手伝いに行こうとはしないんですね。まあ、その気持ちは分かりますけど。

「とか皆穂は美羽を手伝いに行かないの?」

「優衣さん、それを優衣さんが言いますか」

「いや、だつて、皆穂の今年の仕事は美羽のサポートでしょ。だから、てっきり美羽と一緒に仕事しているものだと」

「まあ、確かにさつきまで私も集会所で手伝ってましたけど、近所の奥さん達が手伝いに来てくれて、だから私も休憩中です」

「そつか、いいな、誰か私の仕事も手伝ってくれないかな~」

優衣さん、それはこんな所で油を売ってる優衣さんが言つてはいけない言葉だと思うのですけど。

「どうか、優衣さんは美羽さんの手伝いに行かないんですか?」

「絶対にヤダ」

「即答ですね」

「だつて、私これから神楽の稽古があるし、明日が本番だから先生も気合が入りまくつてゐるし、本当なら前夜祭を放り出して帰つて寝たいよ」

「前夜祭つて、何やるんですか?」

「皆穂聞いてないの!」

「いや、そこまで驚くことではないと思つんですけど。」

「ええ、何も

「くそ~、美羽の奴、皆穂じやなくて私に手伝わせる気だな」

「えつと、何かあるんですか?」

「うん、前夜祭でも一応、祝詞を捧げたりと祭事が少しあるんだよ」

「はあ、そうだったんですね?」

「じゃあ皆穂、私は神楽の稽古に行つて来るから」

何でいきなりやる気を出すんですか。といつも、もしかして私に押し付ける気ですか。

「はいはい、残念でした。逃がさないわよ、ゆ~い」

「あつ、美羽さん」

「ぐつ、美羽、入つてるから、入つてるから離して」

美羽は完全に優衣の首をロックしているみたいで、美羽の腕の中で優衣は必至にもがいていた。

「じゃあ、神楽の稽古は前夜祭が終わつてからね。もう、先生にも

そう告げてあるから

「うぐぐ」

苦しいのか、それとも先手を打たれたことが悔しいのか優衣は変な喚き声を上げる。その姿にさすがに見かねた美羽は、優衣を離して解放した。

「う~、いいじゃん、今年は皆穂がいるんだから皆穂にやらせれば」「ダメよ。大輝さんが今年は優衣にやらせて、皆穂に覚えさせるんだから」

「といひことは、来年は私がやることは決まってるんですね」

「新人だもの、当然でしょ。何事も経験よ、経験

はあ、分かりましたよ~。

「だいいち、そんなに難しくないんだから、皆穂にちょっと教えて覚えさせればいいじゃん」

よ

「う~、祭事といつても前夜祭は大輝さんの後ろに控えて、必要なものを手渡すだけじゃん」

「そうだけど、渡す順番とか、そういうのを皆穂に覚えさせるためにあんたがやるの」

「はあ、だつたら神楽の稽古をなくして欲しい」

「あつ、先生からの伝言だけど、今夜は完璧になるまで帰さないだつて。まあ、明日が本番なんだからしょうがないでしょ」

「ううつ、完全に他人事だ~。裏切り者~」

いや、優衣さん、別に裏切り者ではないと思いつんですけど。

「じゃあ、頼んだわよ、優衣。さて、それじゃあ…」

というか美羽さん、私てつきり仕事に戻るのかと思つたんですけど、何で賽銭箱の前の階段に座るんですか。

「あ~、美羽がサボつてる」

「あんたが言うな!」

「う~、じゃあ、何でそんなとこに座るわけ

「休憩よ、休憩。私だつて今日はさつきまで動きっぱなしだったから、さすがに疲れたのよ。それを見かねた大輝さんが前夜祭まで休んでいいって、言ってくれたのよ」

「うー、責任者公認でサボるなんてずるい」

「優衣さん、それは違うんじゃ」

「違わぬもん。サボりはサボりだもん」

「というか、日頃からサボってるあんたに言われたくないわ！……そういえば、気の早い店はもうやつてるみたいだから、何か買つてこない？」

優衣さん、明らかにワザとらしいですよ。

「じゃあ、私は力キ氷、練乳がけで」

「私がパシリ！」

「あんたが言い出したんだから、あんたが買つてきなさい。皆穫、皆穫は何にする」

「いえ、私は…」

「遠慮しなくていいわよ。全部優衣が払うんだから」

「オゴリ決定済み！」

美羽さん、さすがにそれはどつかと…。

「じゃあ、優衣さんと一緒に買出しに行つてきますね」

「皆穫〜、ありがとう〜」

「優衣さん、何も泣かなくても」

「しようがないわね。じゃあ、三人分の力キ氷買つて来て
そう言って美羽は袂たもとからお金を皆穫に渡した。

「えつ、いいんですか」

「うん、だいいち大輝さんのオゴリだから」

「どうか最初から決まってたんですね。私達が休憩に入つてることを。

「それじゃあ、行つて来るね」

「行つて来ます」

「おう、じゃあ、よろしく」

美羽さん、さすがに手じゃなくて足を振って見送るのは行儀が悪いですよ。

そんな感じで三人は前夜祭を迎えるとしていた。

前夜祭 前（後書き）

……後書きに書くことが何もない！

はい、その人、なら後書き書く必要ないじゃんとか思わないよ
うに。といふか、後書きは作家にとつてとても大事な場所なんだよ。
何故かと言つと、何を書いても自由だから。

はいはい、その人、引かないように。といふかね、作中ではど
うしてもその作品の雰囲気を壊すことはかけないわけですよ。まあ、
当然なんだけど。

だが、後書きは何を書いても自由、つまり、完全に無法地帯のフ
リーダム、幻想卿にも劣らない夢の世界。

…………あの、もしかして私、壊れかけてます。うーん、な
んか最近変だとは思つてたけど、とうとう末期に入ったかな、こり
や。

はいはい、じゃあワケの分からぬ後書きはここまでにして、い
つもの行きますね。

ではでは、ここまで読んでくださいありがとうございました。そ
してこれからもよろしくお願ひします。

以上、何が末期なんだろうと思つた葵夢幻でした。

前夜祭 後

前夜祭での全ての行事が終わり、美羽と優衣の一人はいつもと同じように皆穫の部屋へと転がり込んだ。

もちろん、夕食をたかるためである。

さすがの一人も気疲れしたのか、床に突つ伏すように寝転んでいた。

「あの～、お二人とも、手伝う気は無いんですか」

「ない」

「同じく」

「即答ですか！ と言いますか、ここ数日ずっと、私がお二人の夕食を作ってるんですけど」

『ありがと～、皆穫』

いや、お礼を聞きたいわけじゃないんですけど。それに、そんな声をそろえて言わなくとも。

「まあ、祭りが終わるまでだから、それまで我慢してちょうだい」「はい、わかりました。それよりも優衣さん大丈夫ですか？」

「皆穫にはこれが大丈夫なように見える？」

「はい、割と平氣かと」

「そんなわけあるか！」

「優衣、そんなに勢いよく立ち上がつて喋ると、倒れるわよ」

「……美羽さん、もう優衣さん倒れましたけど」

「ほつとけば」

「分かりました」

「う～、少しほは心配してよ～」

「あなたを心配できるほどの力は、私には残つてないわよ

「みなえ～」

「優衣さんなら、頑丈に出来てますから大丈夫ですよ」

「……皆穫、最近私に冷たくない？」

「どうか、皆穫があんたの扱い方を覚えただけよ
う、人を機械扱いしないでよね」

「じゃあどう扱えばいいんですか、優衣さん。」

「けど優衣、意外と早く開放されたわね。私はてっきりまだ神楽の稽古をしているものだと思つてたわ」

「去年もやつたから体が覚えてたんだと思うよ。それに、美羽が今日中に完璧に神楽を舞えないと帰してもらえないって言うから、必死になつてがんばつたんだよ」

「おー、おー、そいつは殊勝なことで…」

「美羽さん、たぶんその意味は違いますよ。」

「けどまあ、皆穫も私達の夕食を作つてれば巻き込まれないわよ」

「いきなり、何を言い出すんですか美羽さん」

「んつ、今日は前夜祭でしょ。だから集会所では今頃宴会が開かれてるのよ」

「はあ、そうなんですか」

「どうか、それが私と何の関係が。」

「本当なら私達巫女も接待をしないといけないんだけど、皆穫は疲れきつた私達の面倒を見るつていう口実がないと、今頃集会所でおじさん達の接待をしないといけないわけよ」

「確かに、それは大変そうですね」

「でしょ、だから早くご飯作つて」

「結局それが言いたかったんですね。」

「でも、私達が接待してないって事は、誰が接待してるんですか」

「んつ、とりあえず大輝さんと近所のおばちゃん達、それにバイトの人も手伝ってくれてるんでしょ。確かそうだよね、優衣」

「うん、とりあえず未成年のバイトの人以外で、接待が出来る人に手伝つてもらつてる」

「けど、本来なら皆穫がそのバイトの人達に指示を出さないといけないんだよ。それが新人の皆穫には大変だろ?からつていうことで、私達のお世話をすることになつてるの」

「いつそんなことが決まつたんですか。といいますか…」

「それじゃあ、集会所に行つて手伝つてきますね」

「すみませんでした。お願ひだから『飯作つて』

ふつ、勝つた。

結局、いつも通りに優衣達の分まで夕食を用意した皆穂は、テーブルを三人で囲む。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

なんといいますか、お二人とも疲れている割にはよく食べますね。勢いよく食事を進めていく一人を見て、さすがに皆穂も不思議そな顔をする。

というか、そんな元氣があるなら自分で夕食を作つてください。それほど、優衣と美羽は元氣よく夕食を食らつていいくのだった。

「ふう、『じつけさま』

「じつけさま。皆穂、ありがとうございます」

「いえいえ、お粗末さまでした」

食器を片付ける皆穂、そして再び寝転ぶ優衣と美羽。

お一人とも手伝つ気が無いんですね。というか、さつきの元氣はどこにいったんですか、それとも食事の時限定なんですか。

「そういえば、明日が本祭なんだよね」

「そうね、特にあなたの神楽が一番のメインなんだから、しっかりとやんなさいよ」

「う~、それにしてもなんで私はばかり神楽を舞うことが多いんだろ。大輝さんも私にやつてもらいたいみたいだし」

「あんた、その理由分かつてないの?」

「えつ、美羽は知ってるの?」

「どうかね、私がその理由を知った時はかなりむかついたわ」

「美羽さんがそんな事を言うのも珍しいですね」

「一応私もプライドって物があるのよ」

「へえー、私が神楽を舞うことが多いのは美羽のプライドを傷つけてるのと一緒なんだ」

「凄くむかつくな」

「まあまあ、それで、その理由ってなんなんですか」

「ああ、それ。そうね、明日美羽の神楽の時に説明するから、とうか見たほうが早いわね」

「どうか、明日は忙しいんじゃ」

「神楽が始まるときには人が舞台に集中するからね、私達はその間だけは少しだけ時間が取れるのよ。まあ、バイトの子達に任せただけなんだけどね」

「どうか、それってサボつてただけなんじゃ。

「じゃあ、明日は神楽が始まると迎えに行くから、優衣の神楽がよく見える場所に案内するわよ」

「はい、それは楽しみですね」

「うー、私はそういう話をされると緊張していくよ」

「あんた去年もやつたんだから、少しは慣れてるでしょ」

「それでも、あんな人前で踊るのは緊張するよ。それに失敗なんて許されないんだから」

「まあ、一応祭事だからね。失敗なんてしたら凄く怒られるわよ」

「うー、不安をあおんないでよー」

「どうか、今の美羽さん凄く黒いんですけど。

「あー、そういえば皆穢」

「なんですか、優衣さん」

「お風呂まだ?」

「今日はお風呂まで入る気ですか!」

「私は最後でも構わないけど、優衣は疲れてるから先に入れてあげて」

といつも美羽さんまで入る気ですか。

「はあ、早くゆっくりとお湯に浸かりたい」

「あんたね、お風呂で寝るんじゃないわよ」

「うん、がんばるよ」

えっと、それはお風呂で寝る可能性があるってことですか。

『じゃあ、皆穫よろしく~』

はいはい、もう分かりましたよ。

こうして皆穫は一度風呂を掃除してから、お湯を溜めていった。そしてのんきにお湯に浸かっている優衣の声が聞こえると、皆穫

は一気に疲れた気がする。

そんなかんなやりながら、明日の本祭に向けて英気を養う優衣と美羽、それに反して皆穫はなんだか疲れた気がしたのは気のせいなのだろうか。

前夜祭 後（後書き）

えへ、かなり間が開いてしまったみこみこですが、なんとか書き終わりました。

というか連載を一本やつてゐる時点で自分の首を絞めてるよ絶対。うん。

まあ、そんな訳で次はいよいよお祭り当番になるわけですが、まあ、いつもどおりほのぼのとした雰囲気にちょっととしたスペースを加えてみようと思つてます。

ではでは、ここまで読んでくださいありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、珍しくまともな後書きを書いたなと思つた葵夢幻でした。

本祭

「皆穫、皆穫」

本祭の最中で忙しさが絶好調の中で皆穫は後ろから声を掛けられるが、社務所の対応をバイトの子の任せると振り向くがそこには誰もおらずに扉が少し開いていて、その向こうから手だけ出して手招きしている人影が見えた。

とりあえずそこに行く皆穫。すると突然引っ張られると口を塞がれる。

驚きのあまり抵抗する皆穫だが、そんな皆穫に引っ張り込んだ自分が耳打ちする。

「皆穫、そんなに騒がないで、これからサボるのにバレるでしょ」
そういうて皆穫を介抱したのは美羽だった。

「美羽さん？」というか何するんですか

「とりあえず昨日言つたでしょ。これから優衣の神楽が始まるから迎えに来たのよ」

「……それだけのためにこんな手の込んだ事を」

「そもそもしないとサボれないでしょ」

「……サボる事が前提なんですね。」

「そんな訳で行くわよ」

「えっ、どこにですか？」

「だから、優衣の神楽がよく見える場所よ」

そのまま勝手に行つてしまふ美羽を皆穫は慌てて追いかけた。

「えっと、ここは本当に私の知つている神社なんでしょうか。
皆穫がそう思つほどの歓びを美羽の先導で進んでいく。

「美羽さん、まだなんですか」

「んっ、もうちょっとよ」

はあ、いつたいどこまでいけばいいのか。

皆穫がそんな事を思つていると美羽がその先を指差す。

「ほり、見えてきた」

皆穫達がそこに到達すると、そこは森から開けているが眼前には絶壁があつて落ちたら間違いなく死ぬだろ。」「こんな場所につれて来てどうするつもりなんですか?」「だから昨日言つたでしょ。優衣の神楽がよく見える場所に連れて行つてあげるつて」

「こじがそうなんですか?」「そうよ。とにかく崖っぷちに立つて下を見てみなさい」「……美羽さん、いきなり後ろから押すのはなしですよ」「……いやね、そんなことするわけないじゃない」「なんか一瞬の間があつたような気がするんですけど。」「チツ」

なんですか、そのチツってなんなんですか!「とりあえず見て見なさい」「はいはい」

しかたなく皆穫は言われたとおりに崖っぷち近くに立ち下を見下ろす。

そこには四方に榊とかがり火がもうけてあり、中央には舞殿が設置されており本殿から長い廊下で繋がつていて。そして舞殿の周りにはロープで遮られているが沢山の人々が集まつていた。

「はあ、なんか凄いですね」「来年はあんたがあそこで神楽を踊るのよ」「……来年は雨にならないですかね」「残念ね、雨が降りそうなときには簡単な屋根が作られるのよ。だから雨天決行」「なんか、今から気が引けるんですけど。」「皆穫が来年の事なのに緊張していると下の方が突然騒がしくなつ

てきた。

「おっ、そろそろ始まるみたいね」

皆穂は改めて下を見下ろすと本殿からゆっくりと歩いてくる優衣と、その後ろに演奏用の雅楽を持った人が列を成してゆっくりと舞殿に向かって歩いてる。

「はあ～、優衣さん雰囲気が違いますね」

皆穂の言つたとおりに今の優衣はいつも感じがまったく無く。その歩き方から仕草の一いつまで優雅に見える。

「まあ、優衣も毎日稽古させられてたからね。あれぐらいはやつてもらわないと」

……そんなに厳しいんですか、稽古つて。

そして演奏者と優衣が定位置に付くと演奏が始まり優衣はゆっくりと神楽を舞い始める。

「はあ～」

もう皆穂には言葉は出なかつた。それほど優衣の神楽は優雅で、優衣がまるで天女のようにも見えたからだ。

「優衣さん、なんだかすごく綺麗ですね」

「そうね……」

何故か不機嫌な返事を返す美羽。

「美羽さん……」

恐る恐る声をかける皆穂だが、美羽は大きく溜息を付いた。

「あの子は姿だけはいいからね。じつじつことをやらせると遠く人気が出るのよ」

「まあ、確かに今の優衣さんは綺麗というか優雅というか……」

「いつもの優衣とは想像出来ないでしょ」

「確かに……」

「だから余計に頭にくるのよね」

「美羽さん、もしかしてそれは嫉妬ですか。」

「まつ、それは置いといで、来年は皆穂が踊るんだからよく見ておきなさいよ」

「うつ、今の優衣さんの姿を見ると自信が無くなるんですけど」

「まあ確かにね。でもやらないといけない物はやらないとね」

「どうか、来年は私に決まってるから氣楽ですね美羽さん。

「だからしっかりと見ておきなさいよ」

「はい」

そして改めて優衣の神楽に目を向ける皆穂。

だが皆穂には優衣の神楽よりも優衣自身がまるで別人のように綺麗で、優雅に踊っている姿が本当の天女のように思えて、ただただ見入るだけだった。

そうしていつに優衣の神楽も終わり、祭りも終わりを迎えるのだった。

「皆穂～、ご飯～」

えっと、さつきの私の感動はどうすればいいのでしょうか。
祭りが終わりすっかり疲れきった三人だが、いつものように疲労度が一番低い皆穂の部屋に集まっていた。

「優衣さん本当に神楽を踊つてる時とは別人ですね」

「う～、何だよその言い草は、私だってやる時はやるんだから」

「その代わりやらない時にはやらないのよね」

「いいじゃん、ちょっとぐらいは大目にみてよ」

「いつもかなり大目に見てるわよ！」

「美羽～、そこはもう少しまけるところじゃ」

「これ以上まけたらあんたの価値はタダになるじゃない」

「皆穂～、美羽がいじめる～」

いや、私に言われても困るんですけど。

それにも……。

皆穂は先程とはまったく別人のようだらけている優衣をもう一度見詰める。

さつきの私の感動はいったいなんだったんでしょうか？

永遠の疑問を感じながら三人はいつもの時間を過ごしていくのだ
つた。

そんな訳で最終回です。

というか、いい加減に連載を一本持つ事は今の俺には出来ない。
というかノリで始めてしまったみこみこだからすぐにネタに詰まつ
てしまつた。

そしてそれ以上にエレメが盛り上がつてゐる。したがつてみこみこ
は今回で最終回になりました。というかいい加減にネタが無いので、
まあ、次に巫女物をやる時にはちゃんと設定してから書きますので、
そこら辺は安心してください。特に巫女萌えの人（私も含めて）。

それと私の作品、特にエレメを読んでくれてる方にはお分かりで
しょうが、現在修正作業の真っ只中です。ですが、最近ブログを始め
ました。そんな訳でブログにもエレメの事を触れておりますので、
続きが気になる方はブログも読んでみてはいかがでしょうか。

私のホームページである冬馬大社からいきますのでグーグルで検
索してみてください。

ではでは、ここまで読んでくださいありがとうございました。そ
して今までお付き合いいただいてありがとうございました。更に評
価感想もお待ちしております。

以上、ノリで連載を始めるもんじゃないと思つた葵夢幻でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7117c/>

みこみこ ~岩城神社日誌~

2010年10月8日15時44分発行